

東北アイヌ語地名プロットによる東北〈千年村〉の抽出手法	2021.02.09
—阿仁川流域における集落分析を通して—	修士論文最終発表
	中谷研究室千年村研究ゼミ
	東野友紀

【目次構成】

【序論】
第1章 本研究について
1-1.はじめにー研究背景
1-2.研究目的
1-3.研究方法
1-4. 既往研究の分類と本研究の位置づけ
第2章 和名抄郷名の性格と東北古代史の分析による〈千年村〉候補地の抽出手法の批判
2-1.はじめに
2-2. 〈千年村〉候補地の抽出手法について
2-3. 『和名類聚抄』における地名の性質とその範囲
2-3-1. 『和名類聚抄』の概要
2-3-2. 『和名類聚抄』に掲載された地名の性質とその年代
2-3-3. 『和名類聚抄』に記載された地名の範囲
2-3-4. 〈千年村〉候補地の抽出手法の批判
2-4. 『和名類聚抄』成立前後の東北史
2-4-1. 東北史に関係する用語の整理
2-4-2. 旧石器時代〜古墳時代における東北地方の地域性と東北内部の地域差
2-4-3. 畿内政権の段階的辺境支配
2-5. 小結
第3章 東北における〈千年村〉候補地の抽出手法
3-1.はじめに
3-2. 東北アイヌ語地名プロットの手法
3-2-1. 既往の東北アイヌ語地名研究についての分析と批判
3-2-2. 東北アイヌ語地名のプロット手法
3-3. 東北縄文・弥生集落遺跡プロット
3-4. 東北アイヌ語地名プロットの分析と比較
3-4-1. 東北アイヌ語地名プロットの分布の分析
3-4-2. 東北アイヌ語地名プロットと東北縄文・弥生集落遺跡プロットの比較
3-4-3. プロットの分析による東北の集落立地傾向の変遷
3-5. 小結
第4章 現地調査：阿仁川流域の集落分析
4-1.はじめに
4-2. 調査対象地選定
4-2-1. 調査対象地選定の理由
4-2-2. 調査対象地：阿仁川流域について
4-2-3. 阿仁川流域に関する既往研究
4-3. 調査概要：現地調査の目的と手法
4-4. 阿仁川流域の各集落の分析
4-5. 小結
第5章 考察
5-1.はじめに
5-2. 東北アイヌ語地名の南限と『和名抄』由来の〈千年村〉候補地の北限
5-3. 阿仁川流域全体の連続性

【結論】
第6章 結論
謝辞
【図版出典】
【参考文献】
【巻末資料】

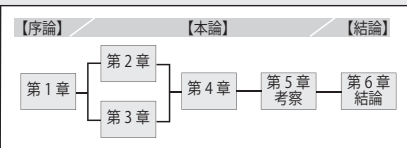


図1 論文構成

【序論】

第1章 本研究について

研究目的

本研究は、『和名類聚抄』(以下、『和名抄』)を元にした〈千年村〉候補地が少ない東北の〈千年村〉候補地を抽出することは可能かという問いに端を發し、以下の2点を目的とする。

①東北北部を対象として、東北における〈千年村〉候補地の立地傾向を空間的に示す

②現地調査対象地の阿仁川流域において、主体を変えながらも集落が存続してきたことを示し、またその要因を明らかにする

研究方法

本研究では、まず文献精査により、東北に〈千年村〉候補地が少ない理由を明らかにし、東北において〈千年村〉を抽出する手法を検討する(第2章)。その手法をもとに、GISデータを活用し、東北の〈千年村〉立地の傾向をマクロ的に分析し(第3章)、その妥当性を検討する(第5章2節)。また分析を踏まえ、1流域に着目して現地調査対象地を決定し、立地条件、集落構造、建築・景観などの要素分析を経て(第4章)、流域全体で集落が存続してきたこと、またその要因を考察する(第5章3節)。

既往研究の分類と本研究の位置づけ

本研究は地名研究、歴史学・考古学による東北史などの従来行われてきた東北研究に対し、GISや現在の集落分析による建築史、殊に都市史・集落史の視点・手法を用いて分析を行うものとする。ここでは関連する既往研究に関して分類とともに内容を簡潔に示す。

○日本の古代地名とその比定に関する研究

日本の古代地名に関する研究は『和名類聚抄』を史料としたものが多く、吉田東伍『大日本地名辞書』、郷岡良弼『日本地理志料』などがある。どちらも地名の現在地比定に際して、地名の音韻の類似を論拠としているものが多い。その他、『和名類聚抄』に記載された地名について、池辺弥『和名類聚抄郷名考証』(吉川弘文館、1966年)、蜂矢真郷『古代地名の国語学的研究』(和泉書院、2017年)等が挙げられる。一方、日本における字名などの小地名の地名研究は、柳田国男に端を發し、柳田国男『地名の研究』(古今書院、1936年)では、住民の生活に密接に関係する小地名の由来やいわれを民俗学的な立場から明らかにしようとしている。また本研究で着目する東北は、地名研究のほとんどがアイヌ語との関係に着目したもので、中でも金田一京助や山田秀三の研究は、東北アイヌ語地名に関する初期の研究であり、両者とも北海道のアイヌ語地名研究の蓄積から東北のアイヌ語地名についての比定を試みている。

○東北史の研究

東北史については、主に考古学・文献史学・民俗学・人類学などの分野から検討が成されてきた。特に古代東北の蝦夷に関しては、蝦夷とアイヌを同一民族とする蝦夷 = アイヌ説と、蝦夷を古代日本人としてアイヌとは異なる民族であるとする蝦夷 = 倭人説の2説で盛んに議論が行われてきた。近年の傾向としては、天野哲也、小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』(吉川弘文館、2007)、工藤雅樹『蝦夷と東北古代史』(吉川弘文館、2013)など、複数分野の研究を合わせた多角的な理解によって既存の論の矛盾点を解決しようという試みが見られる。また、城柵と東北支配についての研究も盛んで、律令国家による東北支配や、城柵の実態について、熊谷公男『古代の蝦夷と城柵』(吉川弘文館、2018)、東北芸術工科大学東北文化研究センター編『北から生まれた中世日本』(高志書院、2012)などにおいて検討されている。一方で、東北学院大学史学科編『歴史の中の東北ー日本の東北・アジアの東北』(河出書房新社、1998)など、辺境としての東北論を超えるものとして、北方社会との繋がりを見いだす研究も近年では見られる。

○〈千年村〉候補地抽出方法に関する研究

〈千年村〉候補地の抽出手法に関する最初の論文は、庄子幸佑「現代日本に於ける古代社会の影響に関する理論的研究 - 古代地名の現在地比定の分析を元に -」(早稲田大学中谷研究室 2013年修士論文)である。また同論文と〈千年村〉プロジェクトによる長年の研究成果を踏まえ、改めて〈千年村〉候補地の抽出手法とその分析を論じたのが〈千年村〉プロジェクトおよび中谷礼仁、庄子幸佑、鈴木明世「〈千年村〉研究その1：平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地研究を用いた〈千年村〉候補地の抽出方法と立地特性に関する研究」(『日本建築学会計画系論文集』87巻791号,2022年)(以下、「〈千年村〉研究その1」)である。

【本論】

第2章 和名抄郷名の性格と東北古代史の分析による〈千年村〉候補地の抽出手法の批判

〈千年村〉候補地の抽出手法と『和名抄』における地名の性質の分析

『和名抄』に関する既往研究の分析によって、『和名抄』に掲載された郷名は、九世紀頃、特に九世紀後半のものであったと確認できた。九世紀末期から十世紀にかけては律令国家における班田のシステムに限界を来し、班田の維持や授与が困難になった時期で、十世紀の郷名は実質的には九世紀末に固定されたものである可能性が高いことがその原因である。また「〈千年村〉研究その1」で規定される〈千年村〉候補地抽出手法の批判を行った結果、古代から社会集団が存在していた土地でありながら〈千年村〉候補地として抽出できないものについて、その原因の違いから、①地名の比定範囲が市域またはそれ以上の範囲である場合、②『和名抄』成立時から途中で地名が変化してしまった場合、③和名抄郷名成立時に畿内政権の支配下になかった場合、④主たる生業が稲作以外であった場合の4通りに分類した。東北地方は、秋田県南部、宮城県北部を境に〈千年村〉候補地がほとんど見られず、〈千年村〉候補地が無い場所に地域的なまとまりが見られること、また東北は関東以南と気候が著しく異なり、古代の生活様式に少なからず差があったと考えられることから、その原因は③もしくは④に該当する可能性が高い。

『和名類聚抄』成立前後の東北史

東北史の既往文献の分析によって、古代の東北がどのように形成されていったのかを確認し、その展開を図2に示した。原始〜古代の東北では、文化圏や気候の違いによって東北の南北の地域差が生まれ、その差が決定的となったのが古墳時代である。その後、七〜九世紀にわたる律令国家の蝦夷の領域への領土拡大政策が行われたが、古代東北の南北差が潜在的に影響を及ぼしていた。特に図3に示したC区以北は、土師器や続縄文文化の土器分布やアイヌ語地名の密集的分布地域で、北方系文化圏の影響が濃厚に残っていた可能性が高い地域である。これらを踏まえて、未だ九世紀には東北北部に律令国家の支配が及んでいなかったために、和名抄郷名には東北の記載が欠けていたことを明らかにした。

第3章 東北における〈千年村〉候補地の抽出手法

東北アイヌ語地名プロットの手法

金田一京助『奥州蝦夷地名考』、工藤雅樹編『金田一京助の世界2古代蝦夷とアイヌ』(平凡社、2004年)、山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』(草風館、1993年)第2編を元に、アイヌ語地名のプロットを行った。参照元の文献に見られる地名について、表1のように比定の類型、プロットの分類を設定し、以下の手順でプロット作業を行った。

①参照元に記載されているアイヌ語地名に加え、山田の作成した略地図上に記載のある地名について、東北アイヌ語地名リストを作成する。

②Google Mapのマイマップ機能を利用し、東北アイヌ語地名リストの地名に関して、「県名 + 字名」または郡名の記載があるものについては「県名 + 郡名(行政区画が変更された場合は旧郡名に対応する区域の名称)+ 字名」で検索をかけ、該当する箇所をプロットする。略地図上に見られる地名に関しては、略地図と位置が大きくずれていないかを確認する。

その結果、文献から抽出した346箇所中、およそ半数の174箇所のアイヌ語地名がプロット可能であった。プロット結果の詳細は表1を参照。

東北縄文・弥生集落遺跡プロット

古代遺跡とアイヌ語地名の分布を比較することによって、抜け落ちている律令国家時代の居住地の立地傾向を推察することを目的として、「縄文・弥生集落遺跡データベース」を元に東北縄文・弥生集落プロットを作成した。データベースから東北6県に位置する遺跡の情報を抽出したところ、縄文時代の遺跡は499箇所中485箇所、弥生時代の遺跡は268箇所中256箇所の**プロットが可能であった**。

東北アイヌ語地名プロットの分析による東北の集落立地傾向の変遷

東北アイヌ語地名と縄文・弥生集落遺跡のプロットを合せて分析した。特にアイヌ語地名プロットに関しては、地形に着目して表2に示した類型で分析を行った。それぞれの分析結果は以下の通りである。

・東北アイヌ語地名…最も多いのは①の山中にあるタイプで、続いて平野と山地の間にあるタイプがほぼ同程度で割合が高い。

・縄文集落遺跡…山間部の川沿いにプロットが多い。

・弥生集落遺跡…全体的に山間部には少なく、平野部や盆地、山裾に多く分布している。

まとめると、東北の集落の立地傾向は、縄文時代に山間部や山裾、弥生時代に平野部、その後再び山間部や山裾へ居住域を移していったと推察される。

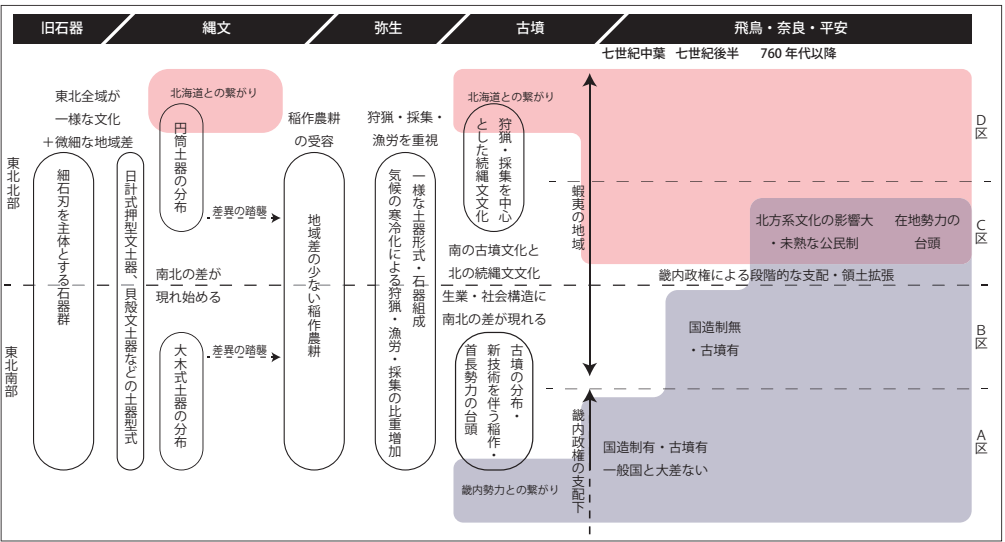


図2 古代における東北の南北の地域差の形成

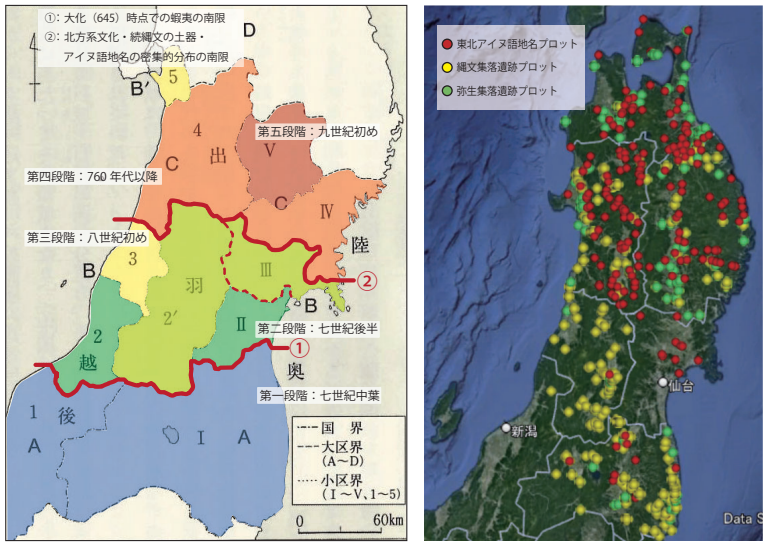


図3 畿内政権による東北への段階的進出

比定の類型									
プロット可能○		プロット可能△					プロット不可		
単一字及び大字	複数	施設名等に残存	市町村以上	和名地名	環境表現名	存在しない	不明	合計	
(一部変更も含む)	大字								
168	6	20	4	0	31	116	1	346	

表2 東北アイヌ語地名プロットの立地傾向分析									
	川の周辺にある	①山中にある	②平野と山地の間にある	③平野・盆地にある	④海沿いにある			東北6県	
プロット数	160	71	68	14	21	174			
割合	91.43	40.57	38.86	8.00	12.00	—			

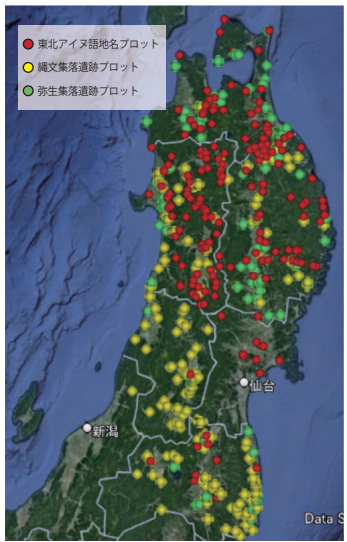


図4 東北アイヌ語地名・縄文・弥生集落遺跡プロット

第4章 現地調査：阿仁川流域の集落分析

現地調査の目的と方針

〈千年村〉研究では、単一大字の調査だけではなく、複数大字を一つの生活圈として全体的に捉え、その中での交通・生産といった繋がりをみる研究や^{*1}、水の利用や水系に着目した研究が行われてきた^{*2}。また、アイヌ語で川を意味する「ベツ(ペツ)」や沢を意味する「ナイ」が東北の地名に多いことも指摘されており^{*3}、アイヌ語地名と川は切っても切れない関係性にある。これらを根拠に、東北北部の調査では、1.水系に沿って、水源に近い山間部から下流までの一帯を調査する手法をとる。その中で、水系に沿った連続性や地形の変化に伴う集落構造の変化を明らかにすることを目的として、現地調査を行う。



図5 阿仁川流域と東北アイヌ語地名プロット

調査対象地：阿仁川流域

○調査対象地選定の理由

以下の理由から、秋田県北秋田市阿仁川流域を調査対象地として選定する。

- ・東北アイヌ語地名プロットが1水系に沿って、まとまって分布しているため
- ・マタギ、鉱業、林業など、複数の生業形態が見られる地域であるため
- ・建築学の既往研究は少ないものの、文献史学、民俗学など複数分野に渡って既往研究が成されている地域であるため
- ・流域の範囲が数日での調査に適しているため

○調査概要

調査日程：9月14日、11月6-9日

目的：①東北アイヌ語地名プロットが〈千年村〉候補地の抽出手法として妥当であるかを確認する

②水系に沿った連続性や地形の変化に伴う集落構造の変化を明らかにする

対象集落：阿仁川流域沿いの①打当(打当内)②戸島内③比立内④笑内⑤根子⑥粕内⑦阿仁合(湯口内)⑧惣内⑨米内沢の9集落。根子以外はアイヌ語地名であり、いずれも単一大字以下の範囲でプロットが可能であった集落である。根子はアイヌ語地名ではないが、マタギの集落として著名であり、既往研究も豊富で、阿仁川流域を特徴付ける集落であると判断したため、調査対象集落とする。

手法：①各集落を見直し、集落構造、地質・地形などの項目について分析を行う

②現地でヒアリングを行い、昔の集落の様子(景観、生活様式)や産業、信仰などについて整理する

阿仁川流域の各集落の分析

現地調査を行った阿仁川流域の9集落に関して、①集落構造(平面・断面)②地形・地質・自然災害③景観的要素(住宅・構築物・材料など)④交通⑤産業(生業)⑥信仰の分析項目に従ってカードを作成し、それぞれの特徴を示した。カードの構成は図6を参照。

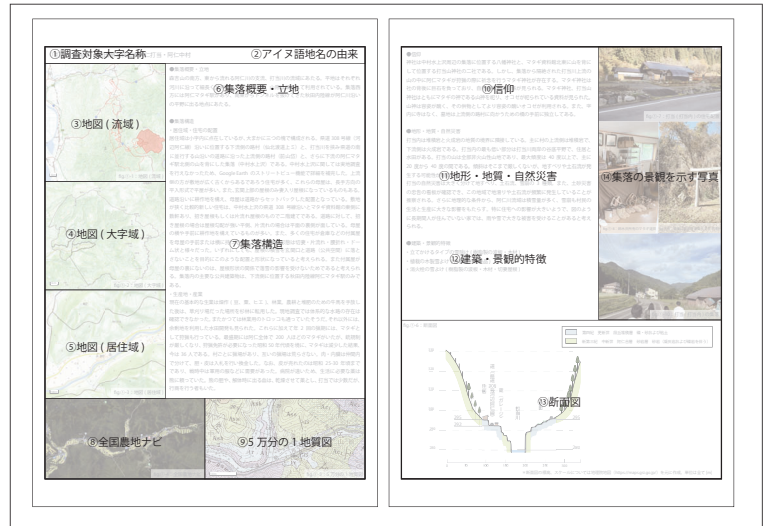


図6 集落分析カードの構成

第5章 考察 ・ 第6章 結論

東北アイヌ語地名の南限と『和名抄』由来の〈千年村〉候補地の北限

第2・3章を踏まえて、アイヌ語地名の南限と和名抄郷名の北限、畿内政権の段階的支配の四段階目の線がほぼ一致していることから、この境界線が日本の古代の民族的な差を示していると考えられ、アイヌ語地名を用いた東北〈千年村〉候補地の抽出手法が妥当であると判断した。

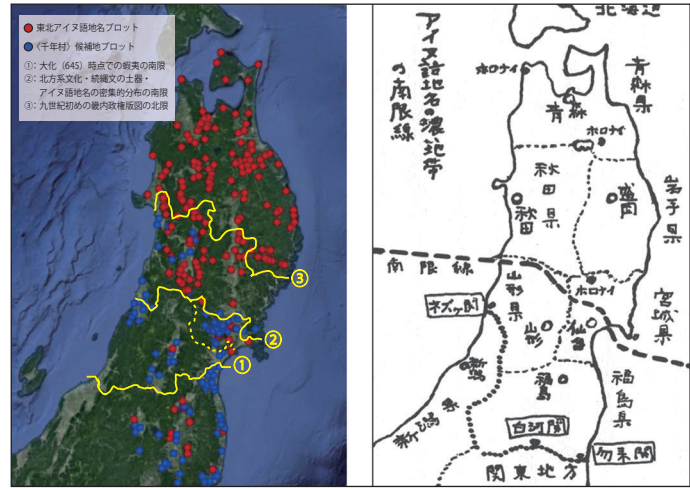


図7 〈千年村〉候補地と東北アイヌ語地名・山田秀三のアイヌ語地名の南限図の比較

阿仁川流域全体の連続性

第4章での各集落分析を踏まえて、阿仁川流域全体の集落構造の共通点や相違点、その原因について考察した。

○大字領域における分析

①打当(打当内)③比立内⑤根子の3集落は、他の集落と比較して、居住域はそこまで大きくないが、大字領域が広く、その多くを山間部が占めている。

→阿仁マタギの集落である打当(打当内)、比立内、根子は、大字領域にマタギの**獵場である山間部を含めたものになっているためか。**

⑦阿仁合は大字領域の中で居住域の占める割合が比較的大きく、居住域はさらに細かく小地域に分けられている。また耕作地が少ない。

→交通が発達しており、集落外部に生活に必要な食料を依存している、寺社が複数あるなど、都市の構造に似ている。**鉱山が栄えた影響か。**



図8 調査対象大字の大字域

○居住域の範囲における分析

→①粕内以北の上流域②根子③阿仁合以南の下流域の3つに類型

①粕内以北の上流域

- ・川に近い方から**水田、住居、神社**の順で標高が高い場所に配置されている
- ・比較的水平野が少なく、耕作地も小規模
- ・笑内、粕内は阿仁街道沿いの路村的構造を持つ
- ・深い谷が形成され、多くの場合山の方の沢から水を引いてきており、阿仁川と集落の関係は薄い

②根子

- ・盆地の中央の低地部には住居、周縁部の高地には**棚田**やそば畑が広がっており、**他の集落と真逆の配置**
- ・住居の配置や道の引かれ方も、微細な高低差に沿って**曲がりくねった不整形を取っている**

③阿仁合以南の下流域

- ・川に近い方から**水田、住居、神社**の順で標高が高い場所に配置されている
- ・居住域周辺には少ないが川の周辺に大規模な水田
- ・比較的古くからあると思われる住宅の裏には倉庫や蔵
- ・商店兼住宅のような特徴的な建築物が多く、**路村・街路村的構造**

川に近い方から**水田、住居、神社**となる配置が共通していることから、阿仁川流域の集落形態の典型的なものは①の形態で、近世における鉱山の発達により、産業と交通に大きな変化が見られ、③の集落構造へ変化したのではないかと考えられる。阿仁合が基点となったのは、**水の流れが緩やかになるのが阿仁合付近**であり、鉱山町の発展には**比較的大い平野**と**鉱山の水運が必要であったため**と考えられる。一方根子は他集落とは異なり、山村での複合的な生業形態やすり鉢状の地形が影響して、**比較的古い山村の集落形態が残存した**ものであると考えた。周囲を山地に囲まれた根子の集落は、野生の力との直接的な対峙を避け「野生の力を緩和する機能^{*1}」として、居住域の周囲を耕作地で囲うような集落形態となったのではないだろうか。

結論

『和名抄』に基づく〈千年村〉候補地抽出手法の批判によって、『和名抄』からは抽出出来なかった東北の長期持続集落の発見手法として、アイヌ語地名を用いた手法を検討した。これによって、今まで発見することが困難であった東北の長期持続集落を補完することが可能となり、それに加えて、稲作中心の〈千年村〉候補地とは異なる原理からなる長期持続集落の生存手法についての検討が可能となった。その一例として、阿仁川流域の集落構造について分析し、山間部の複合的な生業からなる集落として、その主体を変えながらも異なる時代に適合し、現在まで存続してきた地域であることを確認した。

○図版出典

図1:筆者作成、図2:新版『古代の歴史』第九巻東北・北海道(角川書店、1992年)、東北学院大学史学科編『歴史の中の東北日本の東北・アジアの東北』(河出書房新社、1998年)等の内容を元に筆者作成、図3:今泉隆雄「古代東北の地域性」『新版『古代の歴史』第九巻東北・北海道』(角川書店、1992年)図1と同論文の内容を元に筆者加筆、図4:Google earth上に「東北アイヌ語地名プロット」『論文・弥生集落遺跡プロット』を表示したものをスクリーンショット、図5:Google earth上に「東北アイヌ語地名プロット」と阿仁川流域を表示したものをスクリーンショット、図6:地理院地図Vector(https://maps.gsi.go.jp/vector/)、全国農地ナビ(https://www.alis-ac.jp/)、5万分の1地質図(産業技術総合研究所地質調査総合センター)、2021年度千年村ゼミ員による撮影された写真を元に筆者作成、図7:Google earth上に「東北アイヌ語地名プロット」と「〈千年村〉候補地プロット」を表示したものをスクリーンショットした後、今泉隆雄「古代東北の地域性」『新版『古代の歴史』第九巻東北・北海道』(角川書店、1992年)を元に筆者加筆、山田秀三「東北・アイヌ語地名の研究」(草風館、1993年)図8:「E-Stat政府統計の総合窓口」(https://www.e-stat.go.jp/)よりダウンロードした境界データを地理院地図Vector(https://maps.gsi.go.jp/vector/)に表示しスクリーンショットした後、筆者加筆、図9:地理院地図(https://maps.gsi.go.jp/)、5万分の1地質図(産業技術総合研究所地質調査総合センター)、現地調査の分析を元に筆者作成、表1:金田一京助「奥州蝦夷地名考」工藤雅樹編『金田一京助の世界2古代蝦夷とアイヌ』(平凡社、2004年)、山田秀三「東北・アイヌ語地名の研究」(草風館、1993年)第2編の内容を元に筆者作成、表2:筆者作成の図版

*1:神保洋平、中谷礼仁「生産・交通・立地の連続構造分析からみた集落における長期継続要因に関する研究—上州垂糸集と絹流通構造を事例として—」千年村研究その6(2015年建築学会大会要旨)、等を参照、*2:伊東華奈子「集落居住域の構成原理に与える用水系統の作用および集落モデルを用いた研究手法の一考察—高時川中流域の井組集落を対象として—」(2020年早稲田大学中谷礼仁研究室修士論文)*3:金田一京助「奥州蝦夷地名考」工藤雅樹編『金田一京助の世界2古代蝦夷とアイヌ』(平凡社、2004年)、山田秀三「東北・アイヌ語地名の研究」(草風館、1993年)等を参照、*4:田口洋美「マタギ-日本列島における農業の拡大と狩猟の歩み-」(地学雑誌2004巻113号)

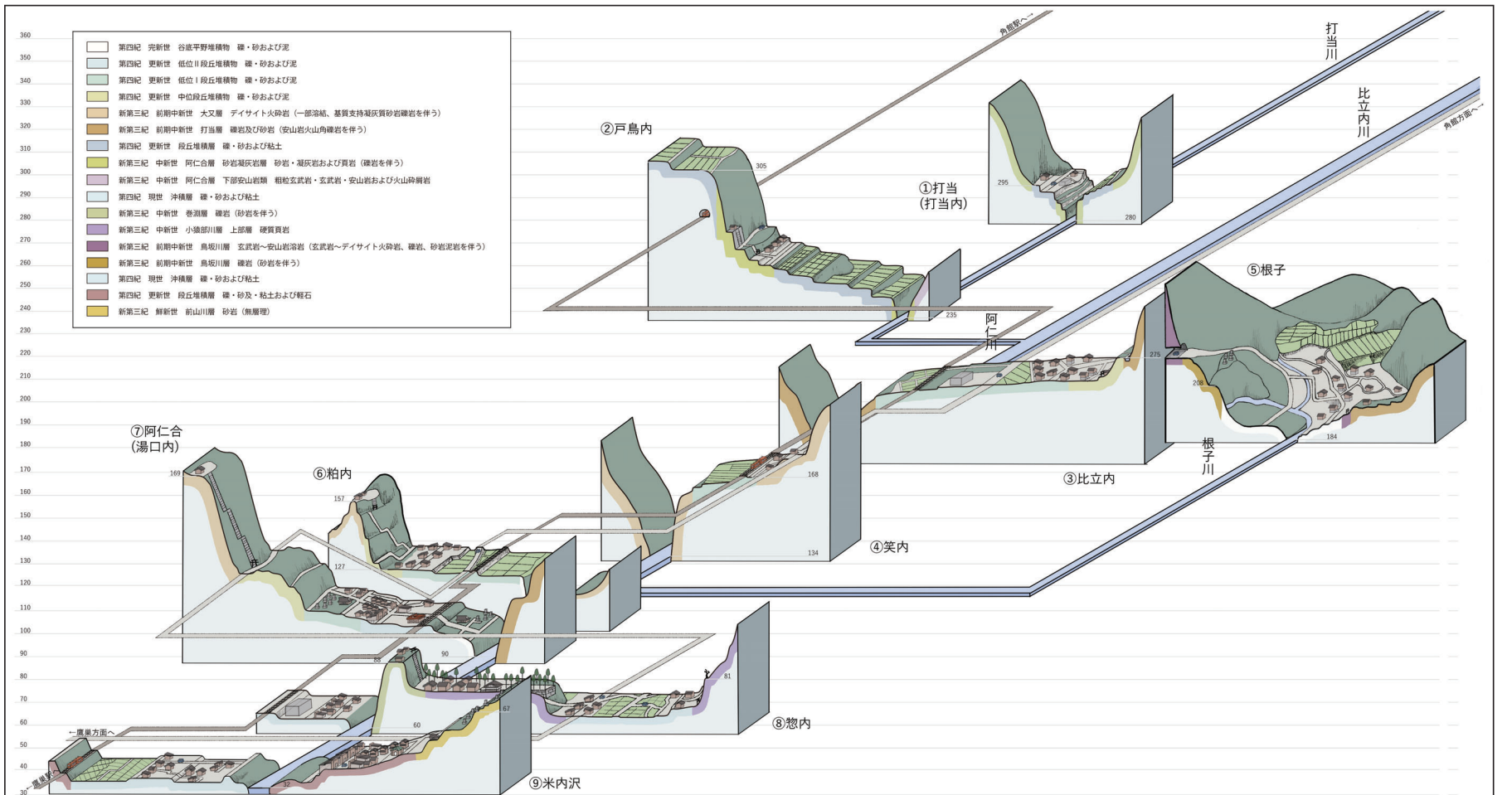


図9 阿仁川流域断面アクソメ図